
聖杯戦争 - 導かれし英霊達 -

にきにき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖杯戦争 - 導かれし英霊達 -

【Nコード】

N1699BA

【作者名】

にきにき

【あらすじ】

かつて、冬木の地で行われし聖杯戦争

それは、聖杯の破壊という形で決着が付き、聖杯は完全に消滅。

2度と行われる事は無いと、思われていた。

しかし、冬木の地より遙か離れた別の地、別の世界にも聖杯はありそこでは、冬木の聖杯戦争とは少し違う理により始まるうとして
いる。

*この作品は聖杯戦争を複数の別の作品のキャラ達が行う物語です。
こいつたのが嫌い、という方は見ない事をお勧めします。

プロローグ

聖杯 それは、どんな願いでも叶える事が出来るという
神秘の結晶。

それを手に入れる為、7人の魔術師がマスターとなり7体のサーヴ
アントを召喚し、
それを使役し最後の1人になるまで戦い続ける。

英霊 それは、過去に偉業をなした存在。人々から崇め
られ、称えられ
英雄とされた者達。もしくは、自身の為に行動した結果、人々に
称えられた存在。
だが、今回行われる聖杯戦争は違いが大きい、何故なら過去だけで
は無い、
こことは違う、他のどこかから呼ばれ、そして、始まる。

そして、この度、新たな聖杯戦争の幕が上がる。

夕暮れの街、人が少しずつ居なくなっていく中に、3人の人影があ
る。

「は、今日は楽しかったな」

3人の内、1人は男で、その男が2人に言う

「そうだね、また行きたいね」

「ああ、中々面白かったな」

2人の女性は、頷くとそれぞれ答えた。

「でも、早く帰らなとまずいな。この辺りって確か最近通り魔が出るって言ってたからな」

「安心しろ、その時は私が守ってやるぞ一夏」

一夏と呼ばれた男は苦笑しながら

「ありがとなラウラ。でも、男としてそれは気が引けるんだよな」

「でも実際、ラウラの方が一夏よりも強いよね？」

「うっ、それを言うなよシャル・・・」

シャルと呼ばれた少女の言葉に一夏は落ち込んだ。ラウラはそれを聞き、

頷いている。3人はシャルこと、シャルロットがプールの無料券を手に入れて、

それが3人分だったので、一夏とラウラを誘い、3人で遊んできた帰りだ。

唯、一夏が言ったように3人が居る辺りは最近、通り魔が出没し、死者は出ていないのだが、怪我をしたり意識不明になった人間が何人も出ている。

ISを所持しており、訓練も受けている3人であれば大抵の相手に、やられる事は

無いだろうが、それでも用心に越した事は無く、早めに帰ろうとしていた。

暗くなってきた事によって人気の無くなった、公園近くを歩いていると

「うっふふ。次の獲物、みつけた」
「え？」

どこからか声が聞こえてきた。辺りを3人が周囲を見渡すと公園の木の上に小柄な人影を見付けた。その人影は木の上から跳ぶと、地面に着地した。

降りて来たのは、白色の髪を腰まで伸ばし、ゴスロリファッションの少女だった。

そして、一夏達を見ていると、行き成り迫って来た。

それに最初に反応したのはラウラだ。ラウラは一夏達の前に出ると、手刀を繰り出すが

相手はそれを簡単に避けると、蹴りを腹に入れた。

「がつ、……………」
「っ！ ラウラ……………」

一夏は何が起こったか、すぐには理解出来なかったが、ラウラが吹っ飛ばされた事で、

ハッとし、倒れているラウラに駆け寄り意識を確認すると、

「つく、大丈夫だ、それよりも奴はかなり強いぞ……………」

「へえ、今のを喰らって意識があるなんて、中々やるじゃない。

今まで襲った連中って、全員弱くて死んだり反応しなくなったりで退屈だったから、もう少し遊べそうかな？」

今まで襲った連中、というのを聞きシャルロットが

「もしかして、最近出てる通り魔って……………」

「っ、そんな、こんな子が？」

一夏は信じられない、と思ったが訓練を受けているラウラの攻撃をかわし、

一撃でここまでのダメージを負わせるのは、少なくとも一般人には不可能だ。

そう考えた一夏は、自分の腕に装着されたガントレットを見てから、

「シャル、ラウラを頼む」

そう言い、シャルロットにラウラを任せると、襲って来た少女に向かって

駆け出すと同時に

「こい白式！」

一夏がそう言うのと、体の周りが光りIS『白式』を装備した状態になった。

流石に武装を出す訳にはいかなかったので、一夏はそのまま抑え込もうとした。

それを見ていたシャルロットもラウラも、そして一夏もそれで決着が

付いたと思った。・・・だが、その考えはすぐに打ち崩された。

何故なら少女は

生身であるにも関わらず、それをかわしている。そして、再び蹴りを放ってきた。

一夏は咄嗟に両手で防ぐが、そのまま、後ろに押されてしまう。

「なっ、嘘だろ？ISと生身で戦えるなんて・・・」

今、目の前で起こった事に驚愕したのは、一夏だけで無く、後ろに居る2人も同じ様だ。

「へえ、驚いた。あんたISが使えるんだ。・・・なら、もう少し本気出しても死なないよね？」

そう言うと、少女は地面を蹴ると、先程よりも速い蹴りを放つて来た。

それは、威力も上がっていて、一夏は防戦一方の状態だ。なんとか反撃しようにも相手には隙が無く、中々攻める切っ掛けが見付けられないでいると、少女の動きが突如止まった。

「あれ？動けない？」

そこには、痛みで顔を顰めているラウラと、それを支えるシャルロットがいる。

2人ともISを装備しており、ラウラは右手を少女の方に向けていた。

「ハアハア、どうだ。停止結界の威力は、これで貴様は動けまい。

一夏っ、今の内に取り押さえる！」

「ああ、うおおおおーっ」

シュヴァルツエア・レーゲンのAICによって、動きを止められた少女に向かって

一夏は、両手で押さえ込んだ。今度こそ終わった・・・

3人は安堵仕掛けたが

「あっはは、驚いた。私を押さえ込むなんて・・・でも、ザンネン」
そう言い、笑みを浮かべると、少女の全身が突然、葉っぱになり
一夏の手を
すり抜けて行った。

「え？」

「なっ！」

「うそ！？」

目の前で起こった事に、今までの驚きが大した事が無い程の驚き
を受けた。

そして、その葉っぱは公園の前に集まると、再び少女の姿になる
と、一夏達に向かって

「あははっ、私が普通の人間だったらヤバかったけど、サーヴァン
トにはそんなの、時間稼ぎにもならないよ」

3人は少女の言った、サーヴァントの意味は分からなかったが、
1つだけ

分かった事がある。それは、自分達は普通では無い敵と対峙して
いる、という事だ。

自分達が今、行える最善の策とは何か、その答えに最も早く辿り
着いたのは
ラウラだ。

（私達がここから離脱するのに最適なのは、誰かが囮となりその隙
に2人が逃げる事だ。

停止結界を使えば数秒だが奴を止められる。その隙に一夏のイグニ

ツシヨンブーストで………)

ラウラがそう考えていると

「俺が足止めをするから、その際に2人は逃げろ」

一夏は前に一歩踏み出して、2人にそう言った。

「なっ、馬鹿な事を言うな。お前がシャルロットを連れて逃げる。

私はこの怪我で素早くは動けない。だから………」

「駄目だ！ そんな事は出来ない。それに白式の速さなら後でも逃げ切れる、だから………」

一夏がラウラにそう告げていると、

「ねえ、盛り上がってるところ悪いけど、誰も逃がすつもりは無いからっ」

そう言い迫って来た。

一夏は、雪片式型を持ち上段から振り下ろしたが少女は右側に回避し蹴りを

放とうとしたが、そこを雪羅のエネルギー爪で攻撃したが、姿が消えた。

と思ったら一夏の上に跳んでおり、今度は刺の付いた蔓が襲って来た。

その攻撃を諸に受けてしまい白式のシールドエネルギーは

どんどんと減っていつている。それどころかシールドで防いでいるのにも関わらず、

一夏自身も傷を負っている。

「さて、それじゃあ、そろそろ留めを差しちゃおうかな。バイバイ、それなりに楽しかったわよ」

そう言い、蔓を数本纏めると、1本の大きな蔓となり一夏に向か
って

放たれた。エネルギーも残り僅か、体勢的にも回避は不可能だ、

3人は誰もが

一夏の死を感じた。

(俺は死ぬのか、ラウラをシャルを誰も守れずに・・・嫌だ、俺は
決めたんだ。皆を守るって、だからっ・・・)

その瞬間 一夏の前に凄まじい光が発せられた。それに、一夏
達はもちろん

少女の方も、その眩しさに目を瞑りかけた。そして、光が消える
と、そこに居たのは

第1話 始まりの戦い そして、集まる英霊達

一夏の前の光が収まると、そこに居たのは、眼鏡を掛けて学生服を着た

1人の青年だった。青年は一夏の方を向くと

「君が僕を召喚したんだね、初めまして。本当はゆっくりと話したいけど、そもいかなない状況みたいだね」

「おっどろいた〜、まさか、あんたがマスターとはね。それにしても、あんた随分弱そうだけど、私を楽しませられるの？」

青年が少女の方を向くと、顔は驚いた表情をしているが声は全く驚いていないようだ。

青年はその言葉を聞き

「残念だけど、僕は君を楽しませる為に戦う訳じゃないよ」

「・・・なんだ、つまんない・・・じゃあ、消えちゃえ！」

そう言い少女は地面を蹴ると、突っ込んできた。青年は慌てずに、何かを呟いた。

「
」

すると、青年の周囲に電気が迸り、少女に向かって飛んで行った。

「!」

少女は驚き、咄嗟に方向転換をすると、それをかわしたが服の一部が焦げた。

それを見ると、怒りの表情をしている。それは、先程までのように表情だけでは無く

周囲に溢れ出ている、少女の殺気からも本当のようだ。

2人はお互いに距離を取ったまま、動かずにいた。その間は僅かな時間だったが、

一夏達3人にはとても長く感じられた。そして、

「やくめた、なんだか面倒になっちゃった。ばいばい」

殺気を消した少女は、そう言い笑いながら姿を消した。

それを見届けた一夏達は気が抜けたのか、ISを解除すると座り込んだ。

青年は、一息つくとも一夏達の方に行くと

「それじゃあ、改めて初めましてマスター。僕はアーチャーのサーヴァントだよ、よろしくね」

「・・・えっと、スマン。状況が良く分からないんだが」

「え？」

それを聞き、青年の方も少しポカンとしてしまったが、

「・・・もしかして、何も知らないの？」

「(コクン)」

一夏が頷くと、青年は苦笑した。

「・・・と、ここまで理解できたかな？」

「あ、ああ。つまり、あんたやさっきのは、聖杯戦争っていうのでこの世界に召喚された英霊ってやつで、俺は、あんたのマスター。それで、聖杯戦争っていうのは、何でも願いが叶う願望機で最後の1人がそれを手に入れて願いを叶える事ができるんだろ？」
「うん、それで大体の流れは良いよ」

アーチャーと名乗った青年と一夏は、公園のベンチの近くで一夏の現在の立場について話をしていた。そこにはラウラとシャルロットも居たが、ラウラは先程の

怪我の事もあり、ベンチに寝転んでおりシャルロットも側にいる。

「でも、実際に目の前で起こった事でも信じきれない、っていうのが本音だよな・・・」

「うん、でもさっきの女の子は普通じゃなかったし、アーチャーも嘘を言ってるようには見えないよ。それに・・・」

シャルロットは、一夏の右手に刻まれた模様『令呪』を見て、言葉が濁した。

一夏の右手にアーチャーの出現と共に突如浮かび上がった紋様『令呪』、マスターの

証であり、サーヴァントに対して強制的に命令をする事が出来るものである。

『令呪』の形はマスターごとに違うようで、一夏の右手に浮かび上がったのは、

剣と盾と翼と雷が円を描くように、描かれている。

「・・・でも、なんで魔術師ってやつじゃ無い俺がマスターになれたんだ？俺、魔術なんて全く知らないんだぞ？」

「・・・それについては、僕も分からないけど、サーヴァントであ

る僕を召喚できたって事は、何か叶えたい願いがあるって事だよ」「願い、か・・・なあ、アーチャー、お前の願いって何なんだ？」「それは・・・・・・・・・・」

そう言われ、口籠るアーチャーに一夏は

「あ、ごめん。言いにくい事なら無理に聞くつもりはないから」「うっん、そうじゃ無いんだ。唯、聞かれるとは思って無かったから。・・・僕の願いは、僕が昔、助けられなかった人達を助けたいんだ」

そう言った、アーチャーの表情は真剣だった。

「・・・正直、俺自身の願いつていうのが何なのかよく分かって無いんだけど・・・、でも、俺は参加しようと思う。さっきのあいつを野放しにしとく訳にもいかないしな」

それを聞き、他の3人は笑みを浮かべた。そして、アーチャーは

「それじゃあ、僕は霊体化するからね。その方が魔力を無駄にしないですむから」

「ああ、分かった」

そう言い、アーチャーの体が薄くなっていき、完全に消えた。それを
見てから

一夏は、2人の方を向くと

「なあ、2人に頼みがあるんだけど・・・」

「分かってるよ、この事は誰にも言わないよ」

「うむ、私達だけの秘密だ」

ベンチから立ち上がり、そう告げた2人に自分が言おうとしていた事を言われて、
ポカンとなった。

「ふふつ、一夏の事だから、そう言いたかったんでしょ？」

「それぐらい分かるぞ。その代わりに……」

「……？」

「私（僕）達に協力させる（させて）」

一夏に詰め寄ると、そう叫んだ。一夏はそれを聞いて戸惑ったのだが、

少しして冷静になると

「駄目に決まってるだろ。相手は今日戦った奴みたいなのばかりだぞ。下手したら死んでたかもしれないんだぞ」

凄み2人に告げるのだが、2人は怯まずに

「それは一夏だって一緒でしょ。だったら少しでも戦える人間は多い方が良いでしょう？」

「ああ、それに話を聞く限り正面から戦うだけが全てでは無いようだしな。マスターとの戦闘ならば、相手が同じ様にISを使うか、教官並みの腕でも無い限り危険は少ないからな」

「……」

2人の言葉と目を見ると、2人共真剣な表情で挺でも考えを変えそうに無い。

一夏は、溜息を付くと渋々だが2人の協力を認めた。

その後、IS学園に戻ったのだが、あれだけ時間が経ったのだ、戻った頃には完全に

日も暮れていた。ラウラの怪我だが、確認したところ骨や内臓に異常は

無いようだが、念の為に戻ってから寮長である、一夏の姉、織斑千冬には

聖杯戦争の事は何も言わず、通り魔に襲われて一夏を庇う為に怪我をしたと告げた。

それを聞き、帰って来てすぐは怒鳴られかけたが、ラウラを保健室まで連れて行く

ように言われ、その晩はそれ以降会わなかった。

次の日の朝、一夏は目を覚ますと、昨日の事を思い出して夢かも、と思ったが

右手の令呪を確認すると、夢では無く現実だった事を理解した。

一夏は制服に着替えると、朝食よりも先にラウラの様子を見に、保健室に向かった。

「失礼します、ラウラの様、子、は……………」

「いつ、一夏?!」

「ん? ああ来たのか」

保健室に入って目の前の光景に一夏は言葉を詰まらせてしまった。

何故なら、そこにはシャルロットとラウラが居たのだが、問題はラウラの格好だ。

ラウラは制服に着替える為に服を脱いでいる。つまり、今のラウラの格好は

下着以外何も着けていない状態だ。

「いつ、一夏、速く出てっつてよ！」

ルームメイトなので、制服を持って来たシャルロットにそう言われ、ハツとした

一夏は

「う、ごめん」

そう言い、外に出ると扉を閉めて、そこで待っていた。暫くしてからシャルロットが扉を開けて

「もう入っても良いよ」

「お、おう・・・」

一夏に言うと、一夏は返事をして中に入った。中に居たラウラはしっかりと制服に

着替えており、一夏が入って来ると

「一夏よ、何故外に出たのだ？お前は私の嫁なのだから気にする必要は無いだろ」

「いや、だから、嫁じゃ無いつて・・・それより、昨日の傷はもう大丈夫なのか？」

「うむ、まだ多少痛むが問題無い」

「そっか・・・・・・・・」

それを聞き少しは安心したが、怪我が完治していない、というのが一夏には

少々胸が痛い。そんな一夏に気が付いたのかシャルロットが

「ねえ、3人で朝食に行かない？はやく行かないと時間が無くなっちゃうよ」

「もうそんな時間か・・・そうだな、それじゃあ、シャルもラウラも行こうか」

「うむ」

一夏の言葉に2人とも頷くと、保健室出て食堂に向かった。

食堂に着くと、既に時間も少し遅く他の生徒はあまり居ない。

「一夏、やっと来たわね。・・・って何でラウラとシャルロットと一緒に居るのよっ」

「そうですね、説明を要求します」

「・・・・・・・・」

その数少ない生徒の中から、一夏の幼馴染である、篠ノ之箒と鳳鈴音。それから

クラスメイトである、セシリア・オルコットが3人に迫った。

「え、えっと、それは、説明すると長くなるから・・・」

「そんな事で納得できる筈が無いだろう」

「そうよ」

「そうですね」

一夏が何とかしようとしたが、箒を皮切りに2人にも問いたださ

れて、どうしようか
考えていると

「お前達、少しは落ち着け。それよりも速くしないとHRに間に合
わなくなるぞ。そしたら、教官に叱られるぞ」
「くっくっく」

ラウラの言った事に、反応し怯んだ。3人とも聞きたい気持ちは
あるが、それ以上に
千冬に対しての恐怖が上回り、やむを得ずそれは、昼休みに、と
いう事になった。

昼休み、一夏を含めた6人で屋上に上がった。理由は今朝言った
ように、

2人と一緒に来た事だ。

だが、既に一夏は疲労している。その訳とは、時間的にはHRが
終わった後、千冬に

呼びとめられて、昨日の事について聞かれたからだ。いくら一夏
を庇う為とはいえ

ラウラがあのような怪我をしたのが、どうやら腑に落ちないよう
で、襲って来た

相手についても色々と聞かれた。もっとも、全てを話す訳にはい
かず、所々に

嘘を交えながら説明したのだが、千冬はどうやら、あまり信じて
いない

ようだったのだが、溜息を付くと何やら呟いてから解放された。
それと、本来なら

襲われた時点で警察に連絡をしなければいけないのだが、一夏の

様子を察してか

千冬は、この事は黙っておく、と言った。

そして、時間は現在に戻って……………。

「それで、ちゃんと説明してくれるんでしょうね？」

「あ、ああ。その、実は昨日ラウラが怪我してな、それで、今朝はその様子を確認する為に寄って、そのまま一緒に来たただけなんだ」
「ああ、一夏が説明した通りで間違い無いぞ」

鈴達に一夏が説明すると、ラウラもそれを肯定した。一夏は少し慌てた感じだったが、

ラウラが慌てた様子も無く、落ち着いていつも通りの口調で言ったので、

少し疑いつつも、納得したようだ。

場所は変わってとある部屋で

「……で、この現状は一体何なのかしら？」

そう言った少女の周囲、すなわちこの部屋の現状は凄まじいもので、机や椅子

様々な物が散乱している。そして、少女に睨まれている1人の青年は気まずそうに

「いや、それがさ、ちょっとしたお祈り、つつうか、願掛けとか、まあ、そういうのをやってただけど、そしたらいきなり爆発が起こって、それで……」

「気付いたら、あのオツサンが寝てたって訳？……へえ、それは大変だったわね。ふふふふ」

「そっそうなんだよ。俺もビックリでさ。はは、あははは……」

そう言い互いに笑い合っていたが、

「アホか……！んな事、信じられる訳無いでしょ。前からアホだアホだ思ってたけど、ここまでアホだったとはね」

少女が怒鳴り散らされて、青年はタジタジになりながらも必死に説得していると、

扉が開き、数人の人間が入って来た。

「おいっ、何ださっきの爆発音は！」

「誰か怪我してないか？」

「なっ何、何なの？！一体何が起こったの？」

「……」

入って来るなり、ほとんどの人間が大声で喋り出した。それを聞き、先程まで

第1話 始まりの戦い そして、集まる英霊達（後書き）

2回目の更新になります。

作品を読んで頂きありがとうございます。

一夏が呼んだのはアーチャー、そして、襲撃してきたサーヴァントについては

まだ、秘密です。

それと、アーチャーのステータスは戦闘が進む度に更新していきたいと

思っています。ただ、今現在は1回、それも僅かな戦闘だけです
ので

更新は致しません。

それでは、またお会いしましょう。

第2話 戦争開始 激突する2体のサーヴァント（前書き）

サブタイトルの通り、2体のサーヴァントによる戦闘が始まります。

前回のは中途半端だったので、今回のがしつかりとした最初の戦闘になります。

なんとか戦闘っぽく書いてみましたが、難しく大変でした。

第2話 戦争開始 激突する2体のサーヴァント

「・・・えっと、それはマジな話なのか？」

「当たり前だ。こんな嘘つく訳無いだろ。信じてくれよ音無」

最初に部屋に居た男は、後から入って来た男の内の1人にそう言い抱きついて行った。

「分かった、信じる信じるから離れる日向」

日向と呼ばれた男は、音無に言われると離れて改めて、未だに部屋の中で寝ている男

の方に向くと

「それにしても、あいつ一体何者なんだ？いきなり出て来たと思っ
たらずっと寝てるしよ・・・」

「あら、そんなの簡単じゃない」

「え？どうするんだ、ゆりっぺ」

日向に、ゆりっぺ、と呼ばれた少女はニヤリと笑うと、男の方に寄って行くと

「すう、起きろー！ー！ーっ！！」

耳元で大声で叫んだ。それは、少し離れた位置に居る音無達でさえ、

煩いと思う程、大きな声だ。そして、男は

「・・・ふああ、煩い奴だ。俺は眠いんだが？」

「あらそう、でもこっちは部屋を滅茶苦茶にされたんだけど？」
「そうか、そりゃ悪かったな」

男は眠たそうに周囲を確認すると、そう言った。その態度に苛立ちを感じ

拳を握りしめると、振りかぶり殴りかかろうとしたが

「このお〜〜〜〜……………」

「お、落ち着けてゆりっぺ。お前もあんまり煽るような事を言っ
なよ」

日向が抑えて目の前に居る男にそう言った。男は目線だけ動かし
て日向の方を向くと

溜息をついた後、体を起こして

「…………分かったよ。マスターがそこまで言うなら、仕方ないな……………」

「へ？マスター？何だそれ」

「…………お前、まさか聖杯戦争を知らないで、俺を召喚したのか？」

「聖杯、戦争……………」

「はあ、まあ良い。俺が1から教えてやるよ」

「信じられない、っていうのが正直なところね。でも、実際にあなたは目の前に居るし、何より、私達も普通だったら信じられないような体験をしてるしね」

それを聞き、部屋に居た人間は少し俯くと考えている。その中で
最初に口を

開いたのは、音無だった。

「日向がそのマスターになったって事は、それに参加しなきゃいけないって事だろ……。だったら、俺は協力したいと思ってる」

「……音無、お前って奴は……………」

音無の言葉を聞き、日向が感動していると

「はあく、仕方ないわね。私達も協力するわ」

「ゆりっぺ！達って僕達も数に入ってるの？」

「貴様！ゆりっぺに反対するつもりかっ」

「ちよっと煩いわよ。ちゃんと理由があるんだから、静かにしてなさい」

怒鳴られると、騒いでいたのも含めて再び静かになった。それを確認すると、

「説明するにしても今は時間も無いし、全員居る訳じゃ無いから放課後、ガルデモを含めた全員を招集してからにするわ。……それじゃあ、ここに居ない人間については分担して連絡をするようにね」

全員に伝えると頷いた。そして、男に向かって

「良い？あんたは此処に居なさい。それと、部屋を片付けておきなさい」

そう言い、部屋を出て行った。

放課後になり、部屋に戻って来て1番最初に目に付いたのは、ソファの上で

眠っている男だった。

それを見ると、体を怒りで震わせ無言のまま殴り掛かったが、

「・・・おいおい、人が折角気持よく寝てたのに、そんな風を起こすのはあんまりじゃないか？」

「うっさい！何寝ているのよ、いえ、寝てる事自体は良いわ。問題なのは・・・何で片付けてないのよ！」

「何でって・・・面倒だったからだ」

「~~~~~」

怒りで声にならない声を上げたが、深呼吸をすると、少し落ち着いてたようだ。

そんな風になっていると、扉が空き、他の人間も入って来た。人数は昼の時よりも

増えており、20人程になっている。

「ほお、随分と増えてるな。まあ良い。それで、何かから話す？」
「そうね、まずは聖杯戦争についてももう少し詳しく話して貰えるかしら？」

「・・・聖杯戦争つてのは、7人の魔術師が7体のサーヴァントを召喚して、最後の1人になるまで戦い続ける、つてものだ。サーヴァントは7つのクラスに分けられている。セイバー・アーチャー・ランサー・ライダー・キャスター・アサシン・バーサーカーだ。んで、マスターになった奴には令呪っていうのが浮かび上がる。それを使えば自分のサーヴァントに最大3回まで強制的に命令できるって代物だ。それと、例えば自分のサーヴァントがやられても、マスターを失ったサーヴァントが居たら、そいつと契約し直す事が出来る」

ゆりの言葉を聞き戸惑いを隠せない中、

「突然こんな事になって戸惑っているのも分かるわ。でも、だからと言って、このまま何もしないで居る訳にはいかないでしょ。だから、私は日向君に協力する事にしたわ。他には、音無君も協力するわ」

それを聞き、すぐに反応したのは2人。

「音無さんが協力するなら、仕方ない、僕も協力してやろう」

「お前がどうなるうか知らんが、ゆりっぺが協力する以上、ゆりっぺは俺が守る」

「・・・直井君と野田君は参加ね。他のメンバーは？」

そう言い残りのメンバーを見ると、

「仲間を見捨てる訳がなからう、協力するぞ」

「ぼ、僕も怖いけど一緒に戦うよ」

「この鍛えてきた筋肉を活かす時が来たようですね」

「戦えない私達が手助けになるか分からないけど、出来る事は協力するよ」

他のメンバーもそう言った。それを聞き日向は嬉しそうに

「ありがとう、俺は良い仲間をもったな」

そう告げた。ゆりはそれを見守ると、男の方を向き

「・・・で、他にも聞きたいんだけど、あなたのクラスと能力は、

どれ位なの？」

「それだったら、マスターなら分かるぞ。マスターには自分のサーヴァントはもちろん、他のサーヴァントも基本ステータスなら分かるようになってるんだ」

「日向君、彼のクラスは？」

「ん、ああ。えっと、クラスはセイバー、ステータスは・・・なあ、これってAが上でそれから下がってくと、B、Cってなるんで良いんだよね？」

「ああ、それで良いぜ」

「うをおっ、だったらすげえ、Aが多いな」

「へえ、って事はあなた当たりって事ね」

それを聞き、少し考えからゆりは、全員の前に立ち

「それじゃあ、これからの計画を発表するわ。まずは竹山君と遊佐さんは他のサーヴァントとマスターについて調べて。街の監視カメラにハッキングしたり、学校や街で令呪を持つてる人がいないか、居た時は何処の誰か分かるようにね。戦闘員は、暫くは数人交代で日向君に付いていて、順番じゃ無い人は、訓練をしておいて。」

それと、最後に1つ・・・無茶して死ぬんじゃないわよ、良いわね」

「……………おう」

「……………ああ」

「……………はい」

話し合いの後、メンバーは帰り支度をし、玄関まで出て来ていた。話し合いが

思いのほか時間が掛かってしまい下校時間を過ぎているので、校舎には

教員以外は居ない。本来なら、校則違反なのだが、生徒会長であ

「・・・」

男は叫びながら突っ込んできた。それを見てセイバーも同じ様に駆け出して行くと

中央で2人の武器がぶつかり合った。バーサーカーは力で押す剣術で、片やセイバーは

技術で返しながら、切り合いをしている。

ガンガンガン

ヒュンツ、キンキン

カーンツ!

互いに一步も譲らない剣戟の嵐、それを見ている日向達は目が追いつかず、

ただ茫然と見ているしかないだけだ。その速さは、嘗てのかなでの速さを凌駕

しており、誰にも手出し出来ない状況である。

セイバーとバーサーカーの戦闘も熾烈を極めている。

「ハツハツハーハーッ」

「・・・」

セイバーが全身に連続の突きを放つと、バーサーカーはその内、急所を狙うものは

全て弾き、残りは受けている。だが、バーサーカーは全く怯まず、戦っている。

そして、セイバーの剣を弾き、一瞬の隙を生み出すと、地面に剣先を付けると

それを擦るように降った。それと同時に剣先に火が灯ると同時に斬り付けた。

その斬撃をギリギリで回避したものの、体勢を崩してしまった。その瞬間に

先程よりも鋭い1撃がセイバーを斬り付けて、セイバーは持っていた剣は後ろに

飛ばされて地面に刺さった。後ろで見ていた全員はやられた、そう思ったが

「ははっ、中々やるじゃねえか。だが、その程度じゃ無理だぜ」

ニヤリと笑うと、腰から白と黒の二丁拳銃を腰から取り出して、バーサーカーに

向かって連射した。それは、かわす暇も無くバーサーカーの両腕に直撃すると

「……………っ！！！！」

痛みで叫びながら後ろに、下がっていく。セイバーはそれを見ながら口笛を

吹いている。バーサーカーは歯ぎしりをしながら、睨んでいたが、ピクリと動くと

そのまま下がって行き姿を消した。

第2話 戦争開始 激突する2体のサーヴァント（後書き）

という訳で、セイバー対バーサーカーの戦闘でした。

決着は付かず、持ち越し、という事になりました。セイバーが使った

武器等から、分かる人には分かったと思います・・・。バーサーカーについては

分かった人は多分いないのだと思いますが、分かった方は凄いと
思います。

それでは、今回セイバーのステータスです。

クラス	セイバー
真名	???
性別	男
属性	中立・善

筋力	A -
耐久	B -
敏捷	B -
魔力	A -
幸運	D ++
宝具	A -

クラス別スキル

・対魔力 B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。
大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

・騎乗 B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、
魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

固有スキル

・不死 A

心臓や頭、全身を剣や銃弾で打ち抜かれた程度では死なず、
意識もハッキリ

していて瞬時に治る。

・???? A

??????

・???? B

??????

と、こういったステータスですが、自分で書いてて何これ？（笑）
って感じでした。まあ、他のサーヴァントもかなり強いので、
まあ大丈夫かな？なんて考えてます。

それでは次回で、また会いましょう。

第3話 女性は怒らせると・・・

その日の夜

一夏達は、明日からの事について話を始めた。

「それで、明日からの事だけど、俺達はどう動くか・・・」

「うむ、戦争となれば最初に必要な物は、食糧と装備だが・・・食料は問題無いとして、装備だが、それは私達にはISがある。となれば次に必要な物は情報だな」

「情報が・・・今回の場合は、他のマスターや他のサーヴァントの事だね。でも、どうやって調べよう?」

ラウラが提案してみるが、シャルロットの言葉で全員が黙り考え込んでしまった。

全員が黙りこんで、どうしようか考えていると

「・・・とりあえず、今分かっているのは、僕が召喚された時に戦ったサーヴァントだけだね。武器を持って無かったみたいだし、ライダーかアサシン、キャスターってところかな。それと、情報もそうだけど、実際の戦闘になった時の事も考えないと」

「戦闘か・・・しかし、正直サーヴァントの強さは私達では手に負えないな。マスターにしても正面きって出て来るとは考えにくい、となれば私達のすべき事は、マスターを抑える点に集中すべきだな」

ラウラの言葉に一夏とシャルロットは頷き確認した。

「でも、って事は出たとこ勝負ってことだよな・・・。はあ、気が重いな」

一夏は溜息を付くと、アーチャーは苦笑すると、

「それじゃあ、今日はこれでお終いつて事で良いかな？」

「うん、そうだね。今日はこれ以上進展はなさそうだしね」

「うむ、そうだな。・・・それでは一夏、寝るか」

「・・・それは、それぞれの部屋に戻ってだよな？」

そう言われ、ラウラは不思議そうに首を傾げると

「何を言っているんだ？夫婦なら一緒に寝るのは当然だろ。それに敵が攻めて来る可能性があるのだ、一緒に居た方が良いだろう」

さも当然とばかりに一夏に言った。一夏は手で顔を抑えシャルロットの方を向くと

「シャルからも何とか言ってくれ・・・」

「えっと、ね、一夏。僕もラウラの言う通りだと思っただ。だから僕も一緒に寝ようと思っただ・・・」

「ちよつ、アーチャーお前から何とか言っただ・・・」

「それじゃあ、僕は霊体化するから。おやすみ」

「アーチャーーーーーーッ」

次の日の朝、結局2人に押し切られてしまい、2人は一夏の部屋で寝る事となり

2人は同じベッドで眠った。一夏は初め、2人がベッドをそれぞれ使うように

言ったのだが、それは悪いから、との事でラウラとシャルロットが同じベッドで

眠った。

「・・・ちか、い・・・起きて。ほら、朝だよ」

「う、うん、シャル？もう朝か・・・ふわぁ」

一夏はまだ目が覚めきっていないようで、大きく欠伸をすると体を軽く動かした後、

洗面所に行き顔を洗い歯を磨くと、ようやく意識がハッキリとした。

部屋の中を見ると、シャルロットとラウラは既に着替え終わっており、一夏が

着替え終わるのを待っている状態だ。

「それじゃあ、俺も着替えたら食堂に行くから先に行ってくれ」

「うん、じゃあね一夏」

「早く来るのだぞ」

2人はそう言い、部屋を出て行った。一夏は2人が退室したのを確認すると

着替え初め、数分で着替え終わり部屋を出た。

その後、食堂にていつものメンバーで朝食をとると、授業を受ける為に

教室に向かった。教室に着くと既に何人が来ており、こちらに気が付くと

「あつ、織斑君おはよう」

「おりむ〜おはよ〜」

「おはよう」

一夏は何人かと、あいさつをして自分の席に着くと

「ねえねえ織斑君、昨日の噂って聞いた？」

「？、噂・・・」

「そう！ここから少し離れた所にある学校で発砲騒ぎがあったって話」

「噂だと、殺人犯がうろついているとか、学生がテロをしようとして準備していると色々噂があるの」

「へえ、物騒な事があるんだな」

「しかし、ここはあまり問題無いのではないか？セキュリティもしっかりしている。何よりEIS学園を狙ったとしても、すぐに捕まるのは目に見えているからな」

「そうですね、教員の方々はもちろん、各国の代表候補生も居るんですもの、無謀としか言いようがありませんわね」

一夏と一緒に教室に入った筈やセシリアも会話に加わり話していると、チャイムが鳴り

千冬が教室に入って来た。

「お前達、チャイムが鳴ったぞ。はやく席に着け」

千冬に言われ、蜘蛛の子を散らすように全員が席に着いた。

HRでは、いつものように話があり、最後に最近起こっている通り魔の件等

物騒なので気を付けるように、との事だ。

そして、その日も特に変わった事は無く、いつも通りの日常が過ぎて行った。

放課後になり、一夏は普段なら自分の部屋に戻るのだが、今日は部屋に戻ると着替え

外に出てランニングを始めた。それは、前回の戦いの際に自分の不甲斐なさを感じ

少しでも強くなりたいと、考えての事だ。暫くランニングをする
と、今度は

竹刀を持つと素振りを始めた。本来ならば、ISを使用して練習
を行いたいのが、

ISは使用するのに許可が必要な上、もし戦闘になった時にエネ
ルギーが無い、

という事にならないようにする為だ。

一通りの練習が終わり部屋に戻ると、アーチャーが実体化し

「お疲れ様、随分頑張ってるみたいだね」

「ん？ああ、俺は皆を守るって決めたんだ。だから、もっと強くな
りたいんだ」

「そっか……」

「……なあアーチャー、英霊って事は何か、すげえ事をしたんだ
ろ？俺に聞かせてくれないか？」

「僕の話しをかい？」

「ああ、駄目かな」

「ううん、構わないよ。といつても全部は話せないよ。それでも、
構わない？」

「もちろん良いぜ。それじゃあ……」

一夏が話を聞こうとした時、コンコン部屋の扉がノックされた。
2人は一瞬不味い、
と思っただが

「一夏居る？」

「夕食を食べに行くぞ」

声の主がシャルロットとラウラだったので、安心するとアーチャーに行つて来る事を告げて部屋を出た。食堂に向かう最中

「へえ、アーチャーの話しか……ねえ僕も聞いても良い？興味があるんだ」

「私もだ。興味が湧いた」

アーチャーに聞いてみないと分からない、とは言ったが、2人はそれで良いようで

納得した。それと、2人に練習をしていた事を告げると

「そうか……なら私も明日からは付き合おう。1人で行うよりは効率的だ」

「じゃあ僕も一緒にするよ」

「良いのか？俺の都合に2人を巻き込むのは……」

「気にしなくて良いんだよ。僕達がやりたいからやってるんだから」

シャルロットの言葉にラウラも頷き、それを見た一夏は照れ臭そうに礼を言った。

そして、食事を終わると2人と一夏の部屋に行くとアーチャーは実体化し

3人の方を向き

「それじゃあ、話すよ。そうだね、まず僕が戦ったのは正確には、この世界じゃ無いんだ。異世界で主に戦ってたんだ。その世界は、2つの国が戦争をしていて、おまけに怪物がいたんだ。僕はそこに

行つて戦うことになった。最初は異世界に行けて凄く嬉しかった、でも、村が怪物に襲われて、何人も人が死んでいった。それで、僕は怖くなって1度は逃げたんだ……。でも、そこで必死に戦つてる子の事を考えたら、居ても経つてもいられなくて、それで戻つたんだ。といつても結局何も出来なかつたけど、それでも皆で必死に戦つて、怪物を倒したんだ」

「……すげえな、そんな風に行動できるなんて」

一夏が呟くと、横から

「何言つてるの、一夏だつて凄いや。それは僕やラウラ皆が認めてるんだよ」

「ああ、そうだぞ。だからもつと自信を持って」

3人の会話を聞き、アーチャーは微笑み

「君は僕に何だか似てるんだね」

「そ、そうか？なんか照れるな」

「ははっ、だから僕は君に召喚されたのかもしれないね」

3人はもう少しアーチャーの話の聞きたかつたが、夜も更けてきたので、

昨日と同じ様に一夏の部屋で眠る事になった。

「はじめ……、私の……。は……う……」

一夏は夢を見ていた。それは、どこか温かく心が楽になっていくようだ。

場所はどこかの屋上、目の前には女の子が居るが、よく見えない。その女の子を

見ていると、ドキドキし、もっと一緒に居たい、そう思う。

場面は変わり、その女の子が自分の隣に座り何かを話している。

その子は笑顔で

自分もおそらく同じ様に笑っているのだろう。そんな風に、ずっと時間が過ぎて

いき、心には『幸せ』という感情だけが存在している……。

場面が変わると、そこには、その子以外にも3人増えている。その子達と

騒がしくも、楽しい毎日が過ぎていき、学校に行けば友達と笑い合い

自分も皆も幸せな、そんな日々が続いていく、そんな夢。

「……んっ、んんん……。……何だっただんだ？あの夢」

朝、起きた一夏はそう言い、体を起こすと、布団が盛り上がった
いる事に

気が付き、恐る恐ると布団を持ち上げると、そこには……。裸の
ラウラが

眠っていた。

「なっ、ラウラ！ お前何やってるんだ」

「……ん？ 起きたのか。いやなに、最近一緒に寝て居なかった
のでな」

「だから……」

「一夏？何してるのかな？」

声がした横を見てみると、綺麗な笑みを浮かべているシャルロットがそこに居た。

しかし、その笑みとは裏腹に、シャルロットから発せられる黒いオーラに

一夏は恐怖を感じた。

「ねえ、一夏は何でそんな事してるの？一夏って女の子だったら見境が無いのかな？ふふっ、あれ、何でそんな顔してるの？僕はちよつと質問してるだけだよ。ねえ、答えてよ」

「シャ、シャル、落ち着けこれはラウラが勝手に入っただけで・・・」

「・・・言い訳は、それでお終い？じゃあ覚悟は良いよね」

「ちよつ、ま、待てシャル・・・わあーーーーーっ」

「・・・酷い目にあつた」

「ははっ、大変だったね」

あの後、2人が先に行つてから着替えていたのだが、その際にアーチャーが実体化し

一夏に話しかけてきた。アーチャーの言葉と表情には何か悟つたような

ものがある。

アーチャーは、話を終えたあと霊体化し消えた。着替え終わった一夏が食堂に

向かう途中、箒を見掛けたので

「箒、おはよう」

「ん？ああ、一夏か。おはよう・・・どうした？朝から随分疲れているようだ」

「え?! あ、ああ。ちょっと夢を見てな、それで、なんだか睡眠不足なんだ」

授業が始まり、ISの訓練という事で、アリーナに集合している。今回は2組との

合同訓練なので、普段よりも人数が多い。暫く訓練を行っており一夏と第の1対1の戦闘を行う事になった。他の生徒は観客席に移動し、

戦闘を見ていた。状況は現在は互角、といったところだ。一夏の斬撃は回避され

第が雨月によるレーザーを放出するも、それはかわされ、一進一退の攻防が

繰り広げられている。しかし、白式はエネルギーをかなり消費したようで、

残りは少ない。紅椿も同様だが、このまま長引けば一夏の負けは目に見えている。

一夏は残量エネルギーや状況を確認しながら、最善の手を考えているが、

中々良い案は考え付かず時間が過ぎていつている。そして、一夏が攻勢に入ろうとした瞬間

「っ!!!」

アリーナ全体、いや学園全体を覆う程の赤い世界が広がった。そして、それと同時に

目の前で戦っていた第や観客席から見ていた他の生徒の動きが止まった。

何が起こったのか、周囲を見渡していると、いつの間にか観客席

の上に1人の男が

立っていた。その男は、ダークスーツを着ており、サングラスにオールバックの髪型

という姿だ。そして、

「よお、お前がマスターか。それに、そこに居るのがお前のサーヴァントだな」

そう言い、一夏の後ろの方を向くと実体化したアーチャーが居た。敵はそれを見て、ニヤリと笑うと、

「それじゃあ、早速始めようか」

第3話 女性は怒らせると・・・（後書き）

次話を更新しましたが、今回は戦闘も無く基本的には平和な日常の話でした。

ちなみに私は、シャルロットとラウラが大好きです。

ですので、2人が少し鼻厘されているような気がしたら、それが原因です・・・。

書いてて面白かったです（笑）

次回でアーチャーが戦闘を行うので、ステータスの一部を公開しようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699ba/>

聖杯戦争 - 導かれし英霊達 -

2012年1月8日23時47分発行